



TITLE:

生産利益と消費利益の衝突

AUTHOR(S):

河田, 嗣郎

CITATION:

河田, 嗣郎. 生産利益と消費利益の衝突. 経済論叢 1919, 9(4): 585-600

ISSUE DATE:

1919-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/127578>

RIGHT:

生産利益と消費利益の衝突

河田 嗣 郎

一 現時の經濟と兩者の衝突

現時の經濟組織の下に在つては、生産利益と消費利益とは、兎角一致し難いものである。其の利害の不一致は、啻に生産者と消費者との間に之を觀るのみならず、國家の政策に於ても兩者其の何れを取るべきか、其の何れを重んずべきかについて、時々調子の狂ふを見るのである。現今我國に於て經濟生活が一般的に甚しく不安を感じるに至り、社會問題などの其間に喧しく起り來りたると同時に、國の經濟政策が大に行詰つて見ゆるのは、是亦やはり生産利益と消費利益との大いなる矛盾より出でて來た狀態であつて、然かもまた其間に處すべき國家の政策の大方針が定まらず、定まつたものは時の實狀の要求する所に合致せぬからのである。

現時の個人主義經濟組織の下に在つては、生産は個々の私人や私會社が營利の爲めに私の企業として之を行ふものであるから、其の生産は果して能く實際の需要に適合するや否やの豫め知り難く、生産が行はれて供給として市場に表はれて見て、然る上に甫めて果して善くそが實際の需要に適合するや否やの定まる次第である。昔時に在りては生産は消費を目安として行はれ、實際

の需要に對して其の必要とする種類品質及び分量の財貨の生産が行はれ、生産は全く必要の爲めにする生産であつた。即ち需要が先づ定まりて然る上に之に對して生産供給が行はるのであつたから、供給は常に善く需要に適合し、生産は消費に適合するを得た。然るに現時の生産は只管營利の目的の爲めに行はれ、然かも生産者は市場に於ける需要を豫想して先づ生産を行ひ供給を行ふ有様であるから、供給が先づ行はれて需要は却つて後から之に對して表はれ來る次第である。であるからして現時に在りては、供給が果して好く需要に適合し得るや否やは豫め之を知るに難く、實際に於て両者を競合さして見てからでなくてはわかり兼ねることとなるのである。

斯かる状態に在る生産は洵に不安定なもので、社會主義者が好むで之を生産の無政府的状态と稱するは、其故ありとせなければならぬ。

次に又消費の方面に在りても、現時の個人主義經濟組織は、之を各個人の自由に放任し、各個人は大多數は家庭を作つて之を單位として、個々思ひ思ひの消費を行つて居る。而して財貨に對する其の消費上の必要は需要として市場に表はれて、供給との適合を得んとするものであるが、それが果して能く供給と一致適合するを得て、消費上の満足を見得るや否やは、到底豫見し難い。尙に豫見し難きのみならず、實際に於ては消費上の必要が満足され得ない部分は、或は却つて満足さるる部分よりも大なる有様である。

斯くて現今之を國民經濟といふ全體の組織より觀れば、一方に消費上の必要の存し、他方に盛に生産の行はるゝに拘らず、兩者の満足なる適合を見出し得ざる結果として、國民經濟全體が調子の取れぬものとなり、一面に於ては生産不安、企業不安の弊害を伴ひ、他面に於ては消費不安、生活不安の疾患を生み、つまり經濟組織全體が不安定のものとなり、經濟生活と引きては國民の一般的生活をして、不安定なるものたらしむる次第である。社會問題の如きは這間に生じ來る根本組織上の問題である。

加之、現時の經濟組織の下に在りては、消費は人生々活上の必要として嚴存するものなるに拘らず、他方之に對して其の満足の爲めに行はるべき生産は、消費上の必要といふことを目安とせずして、専ら營利の爲めに行はれ、營利上得策と見ゆる場合には、國民生活上の必要は之を無視しても、利の爲めに業を行ひて顧みざる有様なるが爲めに、生産と消費とは、たゞに右に述ぶるが如く、消極的に不適合を來すのみならず、進みては更に積極的に利害衝突を惹起せざるを得ない。斯くて現時の經濟組織は幾多の難解なる問題を發生せしめ、或は是が爲めに經濟組織そのものゝ解體を齎すの己むを得ざるものあるを思はしむるに至る次第である。私は此の見地よりして、茲に簡單に、現下の我國の經濟生活上に表はれたる諸多の問題を大觀的に判斷して見たいと思ふのである。

二 貿易上に於ける其の衝突

生産と消費との利害衝突は右述ぶるが如く、現時の經濟組織の下に於ては、當然に生ずべきものであるから、其の發露は今に始めぬことであるが、大戰以來我國の經濟界も俄かに活躍するに至つたが爲めに、此の利害衝突は特に目立つて表はれ來るやうになつた。先づ其の最も大いなるものとして、大體の傾向に關する議論をすれば、開戦後一二ケ年にして表はれ來つた我が輸出貿易の伸張と之に伴ふ内地生産業（特に製造工業）の隆盛との事實が一方に存するに拘らず、他方に於ては國內の消費貨物は却つて減少し、國民一般の生活は却つて貧弱なるものとなつたことである。

之を生産利益より云へば輸出の彌が上にも殷盛となり、生産業の之に連れて著大なる發達を遂げ、益々お金が増加つて所謂經濟界の大好景氣を呈出せむことは、最も好ましきことたるに相違ない。然るに之を一般消費者の側から云へば、如何に國內の生産業が盛になつても、其の生産に依りて増殖されたる貨物が國內の消費に向けらるゝよりも却つて多く輸出せられ、然かも其の輸出に依りて得られたる代價は、たゞ資金として外國に貸付けられたり、在外正貨に繰入れられて内國兌換券の増發の基礎となつて國內に於て濫費せらるゝばかりで、十分なる資本化の行はるゝ

所なく、財貨の上に於て國內の生産と輸出入とを突合はして計算して見て、國內に残る物や入る物よりかも、出て行く物の方が多く、また近き將來に資本が働を生じて財貨の國內供給を豊にする見込のない場合には、その狀況は決して一概に喜ぶべき狀況とすることが出来ぬ。然るに之を開戦以來今日に至るまでの實狀に照して見れば、輸出に依りて贏ち得たる資金は、其の十分なる資本化行はれ難く、國內に於ける財貨の供給は到底増加せる需要に應じ難くして、國民一般はただに物價の驚く可き騰貴に惱さるゝのみならず、實質的に財貨の缺乏を感じ、國民一般の生活の内容は戦前よりも却つて貧弱となつて來た有様である。茲に生産者の利益と消費者の利益との大いなる衝突は實驗せられつゝあるのである。

之を生産者から云へば、たゞ貨幣利得の大なるを以て其の業務の目的とする次第であるから、生産品は之を内國に賣ると外國に賣るとは敢て問ふ所にあらず、之を外國市場に賣つた方が利得多大なりと思ふ限りは、内國の事は顧るに暇なくして、幾らでも外國に輸出するのである。現に開戦以來、國內に於ける消費貨物の供給は漸次不足勝となれるに拘らず、食料品といはず、原料品といはず、製造品といはず、たゞ此の企業上の利得の爲めに夥しき輸出を見たのである。

然るに國家全體の利害より考へて常に經濟に對しても公平なる政策を施さねばならぬ任務を負ふ政府も亦、現組織の下に於ては兎角生産偏重に傾くを免れ難い。それは現時の經濟組織が大體

に於て生産利益を本位とする組織なるに加へて、今時の政府を形造る者は、彼の官僚軍閥にしても、政黨にしても、大抵地主や資本家の勢力を基礎として立つものであるから、一般消費者の利益を犠牲にしても生産者の利益を擁護し増進するに忠なる者たるが爲である。されば我國の實狀に於ても、戦時以來右述の如き情勢ありて、少しく時情を達觀する者ならば、寧ろ多少は生産者の利益を抑ゆることも、無制限なる財貨の輸出——特に國民の生活に直接至要の關係を有する種類の財貨の輸出——は或は之を禁止し又は制限して然るべきであるのに、殆んど多く之を爲さず。たゞ成行の儘に放任するのみならず、却つて政府に於て無理算段をして迄その輸出を奨励した有様である。是は洵に、自己の關係筋や政黨政派の利害の爲にせられたものとすれば、言語同斷のことであるが、其點は暫く之れなきものとするも、一般的に現今の如く一種の重商主義的見解の廣く行はれ、貨幣利得を多く收むることが即ち國を富まし民を富ます所以なりとする見解が、根強き勢力を有する場合に在りては、之に捕はれたる者は、誠心誠意を以て政務に當るにしても、尙且つ此誤に陥ることとなるのである。されば禍根は寧ろ多く現時の資本主義の組織と之を支配する新重商主義的の見解とに存する次第であつて、此の組織と此の見解の續く限り、生産利益偏重の爲めに、一般消費者の利益が多少ともに犠牲に供せらるゝは、洵に已むを得ぬ所である。

尤も我が政府も時弊のあまりに甚しきを見ては、多少は一般消費利益を顧みて、或種の財貨の

輸出禁止や制限をしたが、それは併し甚だ遲播きで又頗る手緩いものであつた。謂はゞ申譯くらゐなもので、殆んど見るに足る効果を擧げ得なかつた。

三 食料問題に於ける其の衝突

次に之を食料問題に就いて見るも、右の事情は異なる所がない。即ち開戦以來暫く國內の食料品の供給豊かに行はれ、米麥價も比較的低安なりし際に當つては、早晚必ずや一般消費能力の増加の爲めに、食料品特に米穀に對する國內需要の増加し來りて供給難を醸すべきことの豫想されたるに拘らず、米麥の輸出が自由に又可也盛に行はれたるは勿論のこと、既に米穀供給不足と米價騰貴との事實の表はるゝに至りても、依然として多く其の輸出に對する制限の加へらるゝことがなかつた。而して其の嚴格に行はるゝに至つた頃には、既に國內は供給不足に苦みつゝ、大いなる問題を惹起してしまつてからのことであつた。

而して又一方に於ては、國內の米麥供給量不足して國家的には一粒でも其の生産の多からむことを希望する秋に際し乍らも、米麥の生産も現今やはり個人の私的企業として行はるゝ組織なるが爲めに、生産者は常に必ずしも國家的に考へて之が生産を行はず、利得の推算上米作を爲すよりも之を桑園にするを有利と見れば田地をつぶして桑畑とするを意とせず、又麥の裏作を爲すよ

りも他の工業用原料品などを生産するを有利と見れば之を爲して顧みざる有様で、實際此種の多くの事例を見た次第である。是も洵に國家的に見れば大いなる矛盾であつて、生産者の利益と一般消費利益との不一致が齎せる皮肉なる一現象たるを失はぬ。然し現今國民經濟を一個體として之を統轄する何等の力なく、生産を消費上の實際の必要に適合せしむべき調節作用を行ふものゝなき限りは、致方もない所である。

更に又之を米價問題に於て見るも、生産者としては米價は高きほど希望する所であつて、一錢一厘と雖も高きを以て喜ぶべしとするは當然である。然るに一般消費者は反對に其の一厘でも安からむことを希望し、両者の希望は到底両立し難い。現今消費者は到底其の負擔に堪へずとする高き米價も、生産者は尙未だ安きに過ぐとして其の引下政策を非として種々の政治的運動を試むる者すらある。而して從來政府は米價調節なるものを試みたけれども、然らば扱て生産者と消費者と両方面より見て双方とも満足する正當の價格は如何にして見出され、之を標準とする調節は如何にして行はるゝを得るか。從來政府の試みた所は何れも失敗たるを掩ひ難いのであつて、現時の個人主義的な經濟組織を其儘にして置いて、たゞ米價の末に於て之が調節を行はんとする分では失敗は初から知れ切つた話である。消費者を満足せしむるに足るものは生産者を満足せしむるに足らず、生産者に都合よき政策は消費者に取つては不都合なる政策である。所謂正當なる

價格なるもの、實際的に定め難き限り、米價に限らず一般的に價格調節は至難の業である。需給の根本を適合一致せしむる方策を講せずして價格の皮相を追ふ政策は所詮失敗に終らざるを得ない。良醫は病の根源を治するに心掛くるけれども、庸醫は病の兆候にのみ對して無暗に風藥を飲ましたり膏藥を貼つたりするものである。

四 物價問題に於ける其の衝突

物價問題に於ても生産利益と消費利益の衝突は著明に之を見ることが出来る。現今一般物價の驚く可く恐るべき騰貴に會して、一般的に社會生活は甚しき不安に襲はれ、社會の基礎之が爲めに動搖せむとして、物價調節を要求し一般物價の引下策を斷行せむことを政府に要望するの聲は、實に遠雷の如く怒濤の如くに社會に轟き渡りつゝある。然るにも拘らず、政府は言を左右に托して之を斷行するを得ず、今頃になつてもまだ物價騰貴の原因がどうのこうのを説明してみたりなんかして居るのは、聊も何に因るか。之れ亦實に一般消費者の利便の爲めにする物價引下策が、生産利益を傷害せむことを恐るゝからのことである。

現在の異常なる物價騰貴の原因が一面に於ては需要に對する一般的なる物資の供給不足と、他面に於ては通貨の極度の膨脹とに存することは、誰しも之を認めなければならぬ。之は政府の説

明を待つ迄もなく明かな所で、然かも就中通貨の大膨脹が一般物價騰貴の原因として最も有力なるものたることは、如何に之を掩はんとするも能はざる所である。而して其の原因はともかく、今差當りて一般物價を引下ぐべき最も有効にして又實行し得べき方策はといへば、それは通貨の收縮の外に存せざることは否定し難き所である。されば我が政府の極力説明し去らんとするが如く、物價騰貴の原因が通貨の膨脹に在らずして、却て一般物價が騰貴せるが爲めに通貨の膨脹を來したるものなるにせよ、然らざるにせよ、苟も當面の問題として、通貨を縮少すれば一般物價標準を下降せしむるに足り、其力の十分にして其效果の靚面なることの認めらるゝ限りは、政府たるものは、國民の要望に應じて通貨收縮を斷行すべきである。然るにも拘らず、躊躇之を頻りにして敢て斷行し得ざるものは、之が爲めに經濟界の不景氣を來して、生産利益を傷害すべきを恐るゝが爲めたるに外ならぬ。

常に一派の政商輩や御用實業家の説を聞きて經濟政策を行はんとする我が政府は、此の生産利益の傷害なるものを恐るゝこと實以て甚しきものである。かるが故に苟且にも通貨收縮を行ひたる結果、事業界に不景氣を齎し、得らるべき生産利益の失はるゝやうのことありては、それは由々敷大事なりとし、然かもそはたと或る人々の利益の爲めに由々敷大事たるにあらず、國家の爲めに由々敷大事なりとして、敢て通貨の收縮を行はんとはせぬのである。即ち彼等は以爲らく。從來

とかく生産業の振はず、貿易の状況も常に逆調を呈したる我國が、大戦のお蔭によつて生産隆盛を致し、貿易も急に順調となり、莫大の利得を擧げて國富の激増を爲し得たる今日に於て、濫りに國內の小消費者輩の要求に聞きて輕卒に通貨の收縮など行ひて、折角頭を擡げ來れる生産業に打撃を與ふる如きことありては、取返しのかぬことになる、折角與へられたる此機會を自ら好むで拋棄するは愚の極なれば、小消費者輩は苦めば苦め、又彼等を救ふべき道は他にある、生産業は邦家の爲め之を挫折せしめてはならぬと。

彼等は斯の如き見地より、此際物價引下げを行はんが爲めに生産利益を傷害せむことを恐るゝ、愛國的至情よりして、敢て通貨の收縮など之を斷行するを敢てせざるものである。彼等と雖も、一般物價を引下ぐることと反對なるわけではないが、たゞ之を行ふ手段が生産利益を傷害すべきを恐るゝが故に之を行はざる迄のことである。生産利益を傷ふ恐なくして一般物價を引下げ得べき他の有効なる手段あらば、彼等は喜むで之を行ふであらうと思はるゝ。唯だ悲かな、斯の如き有効なる他の手段がないのである。

されば我が政府の執れる態度の如きは、生産利益偏重の現今の——否從來の時勢の要求する所に應ぜるものであつて、彼の個人主義的なる資本主義組織を金城湯池と恃む者は、誰しもそうである。獨り我政府を咎むべきではない。

併し今や時勢は急激に變りつゝある。其の變化の勢が要求する所を知り得ざる者は禍なるかな。其の變化の要求に應じ得ざるものは危い哉。

五 勞働問題に於ける其の衝突

尙又勞働問題の如きに於ても、此種の生産利益の偏重は屢々之を見ることが出来る。例へば彼の八時間勞働や勞賃引上の要求やに關しても、雇主側の謂ふ所を聞けば常にこうである。吾々雇主は雇主として決して勞働者を酷使せうとする者ではない。吾々も勞働者の疾苦は善く之を知つて居る。だから出來得る限り其の勞苦を慰め其の幸福を増進することには常に心を砕いて居るのであつて、又現に之が爲めにする幾多の施設を爲して居る。吾々が勞働者慰安の爲めに費す金額は實に莫大なるものである。けれども既に企業なるものが生産上の利益を擧げんが爲めに行はるるものたる限り、生産上に於ける國家の大利益を著しく犠牲にせなければならぬほどの要求を提起するは勞働者が無理である。今若し十二時間勞働を八時間勞働に短縮するが如きことを行ふに於ては、爲めに生ずる生産利益の亡失は幾千の巨額に上ばるを避け難い。之を亡失せしめざれば應じ難き程度の要求を爲すは、勞働者に於て國家の利益を傷くる責を負はなければならぬと。

雇主は常に此種の理由の下に勞賃の引上や勞働時間短縮やの要求に抗辨するのであつて、其の

抗辨は必ずしもたゞ自己の利得を衛らんが爲めに、口を國家の利益に藉りて苟も免れんとするものではない。彼等は或場合には眞實然か信じて、國家の利益を思ふの念より之を謂はんとするのである。されば之は恰も前に掲げたる場合と同じく、在來の生産利益偏重の見地より出でたる一種の見解であつて、此の見解に對しては、政府も之を正當と見、又現時の經濟組織の下に生産利益を重視する人々は又之を正當とするのである。

而して例へば紡績業の如き大機械を使用し、生産は技術的には大部分機械の働に依りて行はれ、労働者はたゞ其の機械の働を監視し之を補ひ之を助くるに過ぎざる種類の生産業に在つては、労働時間を短縮すれば、生産の結果を減少せしむるは争ひ難き所である。而してたゞ一人々々の労働者の労働時間を短縮するといふ問題だけならば、労働者の數を多くさへすれば生産の減少は之を防げるわけであるが、彼の深夜業禁止や夜業徹廢を行ふことになれば、生産額はどうしても減少せざるを得ないこととなる。されば飽迄生産利益を尊重し、國家は生産利益を犠牲にするを可とせず、飽迄生産の伸張を計り出來得る限りの力を以て出來得る限り多くの生産を爲すを可とするといふ見地に立つ以上は、右等の主張には甚だ理由あることとせなければならぬ。而して生産利益の偏重を以て成立てりとも謂ふを得べき現時の資本主義組織に於て、此種の意見が通りのよいのは當然のことである。

けれども問題は、斯かる生産利益偏重の見解其者が果して正當なりや、かゝる生産利益偏重の産業組織及び一般經濟組織が果して正當のものなりや否やに存する。而して現時に於ける社會運動や勞働運動は此の根本問題に對して疑問を挿み之が解決を見出さんとするものであるから、解答は此の根本に觸れざる限りは、たゞ問題に對して問題を以て答ふるものたるに外ならぬ。

六 消費利益尊重の必要

總て上に挙げたる所のものゝ如きは、現時の經濟に於ける生産利益と消費利益との衝突の表はれ來る主なる方面を試に示したるものたるに過ぎぬ。けれども茲に挙げたるだけに就いて之を見ても、貿易上に於ける一般利益と生産者利益との衝突といひ、食料問題に於て表はるゝ其の衝突といひ、物價問題や勞働問題に於ける生産利益の偏重といひ、何れも之れ現時の經濟の據て立てる精神と其の有する産業組織とが當然に有するものであつて、現時の經濟の精神とし組織とする所が續く限りは、常に一般消費利益が、生産者の利益の爲めに、乃至は國家の生産利益の爲めに、犠牲に供せらるゝ場合多きは免れ難き所である。

然れども詳かに思へば、生産の伸張が、よし國家の利益であらうとも、その伸張は同じく國家を組織せる一般國民の消費利益を犠牲にせなければ行はれざる如き場合に於て、果して正當であ

るであらうか。國家全體としての、又其の永久の、利益と一致するであらうか。若し國家が彼の守錢奴の如く、たゞ金を蓄ふるを以て能事とし、之を以て幸福とするものならば、恰も守錢奴が食ふ物も喰はず着る物も着ず、生命を擦り減らして金を蓄ふるが如くに、國に財貨を積み又は黃金を蓄ふるを以て、第一義とせなければならぬであらう。其の場合に於ては勞働者の血を枯らし骨を碎きても生産を進めなければならぬまい。一般消費者の生活は如何に危殆に陥りても、生産の發達、輸出の隆盛の爲めには、驀然に進み行くを可とするであらう。

併し國家はそんなものではない。國家生活はたゞ經濟生活の一方面だけではないのであつて、他に幾多の方面がある。又經濟生活の方面だけに於ても生産方面ばかりではなくして、消費方面がある。然かも生産は必竟消費の目的の爲めに行はるゝ手段行爲たるに過ぎず、消費が目的であつて、然かも消費とは人の生活を維持し人が人として生きて行く所以の爲めにせらるゝもの、即ち人の生存其者の意義を形造るものなりとすれば、消費の重んぜらるべくして、生産は之に従屬すべきものたるや、多く論ずる迄もない。現時の如く生産が却つて尊重されて消費は時に之が爲めに犠牲にせらるゝが如きは、必竟之れ、人よりも物の重んぜらるゝといふことたるに外ならぬ。目的たる人が輕んぜられて手段たる物が重んぜらるゝは、併し乍ら、大いなる不道理である。物を多く生産せんが爲めに人が人として有する一般消費利益や勞働者の身體やが犠牲に供せらるゝ

が如きは、不條理の甚しきものである。

されば吾等は此の不條理に據て立てる現時の經濟組織特に其の産業組織を改造するの必要を有すると同時に、此の必要の爲には爲政者も一般國民も常に、手段の爲めに目的を犠牲に供するが如きを止め、大いなる覺悟を以て此の改造の任務に對應すべく又貢獻すべく、生産利益に對する消費利益の尊重を實現すべき政策を行ひ、又之に必要な行動を取らなくてはならぬ。併し元來生産と消費とは繋がつて一を爲すべきものであるから、何れを偏重するも不可、要はたゞ兩者をして各々其所を得せしめ、目的は目的として、手段は手段として、渾然たる調和を得せしむるに存する。何れにしても現時の如き生産偏重の弊害は國家の政策に於ても、國民の態度に於ても、一日も早く之を撲滅せなければならぬ。物の爲めに人を犠牲にするが如き政策と一般國民の態度との存する限り、吾等の生活は一日も安んずるを得るものでない。希くは人をして物以上に居らしめよ。而して此の理想は理想としては高遠であるが、實地政策としては之を日常事に行ふことが出来る。現今の時事問題の解決は此の理想の建立に依つて行はれなければならぬ。（終）